

---

# killing time

東野咲希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

killing time

### 【Nコード】

N8909L

### 【作者名】

東野咲希

### 【あらすじ】

ちよつと変わった友達。

キスだってそれ以上のことだって普通に、気が向くままに。それに居心地の良さを感じているから特に変わることもなく。そんな二人の工藤邸での三日間 + α。

# ONE

「・・・今なんて言った？」

名探偵さんの言葉を、もう一度聞き返す。

上目遣いで、彼は言い直す。

「俺んちに三日泊まってくれつつた」

「・・・はあ」

ため息でもなく、呆れでもなく、言葉として「は」と「あ」が零れた。

「宮野なにその気の抜けた反応」

「こうならない方がおかしいでしょ」

読んでいた洋書をぱたんと閉じると、間の空気がすっと逃げ去った。

向かいに座っている彼は、コーヒーをなんでもなさそうに啜る。

私をみつめる碧い瞳を、ちらりとみつめかえした。

「なんでそんなことしなくちゃいけないの」

「なんとなく」

「面倒だわ。そういうの却下」

「おいおいせっかく人がデートの誘いってもんを」

「勝手に恋人気取りしないで。私、いつあなたの告白とか受けた？」

自分の言ったことになぜかそれた気持ちは無視する。

私もコーヒーを啜る。

ちよつと遠くまで車を飛ばして豆を買いに行ってきた甲斐があった。

薰り高いコクは少し立った気持ちを和らげてくれる。

「そつか。別に恋人とかじゃないもんな、宮野と」

当然のように二人、頷く。

「そうよ。いつもあなた、可愛い女の子たちと遊んでるくせに」

「勝手についてくんだよ。それを相手してるだけ」

「あつそ」

言いながらなんとなく、現実を見た気がした。

恋人でもなく、普通の友達でもない。

勝手にお風呂に入ってきたり布団のなかに潜り込んだり抱かれたりしても拒まないし、自分から誘うことだってある。

こういう友達って、あんまり居ないらしい（歩美曰く）。

昔は、淡い恋心なんかを抱いていたりした。

だけどそれは赦されなくて引くことが当たり前で、無理矢理自分のなかに押し込めた。

そのうち、恋心のような気持ちの色はどこか変わってしまった。

で、元の体に戻ってから適度な距離が保たれたなかでその「友達」というカテゴリーになんとかはめ込まれたって感じ。

それで、えーと・・・

それで、なんだったっけ。

思考が溶けてゆく。

こんなこと考えるのめんどくさい。  
なるべく楽に生きてゆきたいから、彼とのことは考えない。

一度考え出したら、堂々巡りだもの。

「それとも、私をおもちやにして遊ぼうとか考えてるの？」

「おもちゃにするには危険すぎんだよ、宮野は」

失礼な言動はいつものことだからスルー。

「じゃあ、なんで？」

「なんか、おまえといちゃいちゃしたいだけ、かな」

「じゃ勝手に引っ付いてくれればいいじゃない」

切り捨て切り捨て、ほんともうめんどくさい。

工藤君の相手はいつも、時間の無駄。

でもこの時間を嫌いになれない私もいる。

無駄って言うかなんていうか、

めんどくさい。

「いいじゃん、人肌恋しいんだ」

媚びるような無邪気なような瞳をみて、なんとなくじゃれついてくる大型犬を思い出した。

「男の家に二人きりで三日も泊まったとか言ったら、あなた博士にぶつ切りにされるわよ」

「博士、ちょうど三日中留守じゃん？」

気づけば彼が、背もたれの向こう側に回ってきて私の肩をぎゅっと抱いた。

そのまま晒した首元に、彼の唇が触れ。

うざいうざいとか思いながらもとろとろした熱い感覚に戸惑いながらコルクボードに目を流すと、

「九日から十一日まで留守。何かあったら新一に連絡すること」

というメモがピンで刺されていた。

「・・・そういうわけね」

「安全対策」

彼が、にやりと笑う。

「あなたと居る方がよっぽどアブナイと思うんだけど」

「狼に喰われちまうぞってな」

後ろから軽く胸に手を這わせてきた工藤君に、着ていたカーディガンの肩をさらりと落として白い肌を見せる。

「美味しく食べてね？」

断るのも面倒。相手してるのも面倒。

面倒なことは嫌い。

なら、受け入れてしまえば面倒なことはなにもない。

それが、相手にとっては赦してるってことになり得るらしいけど。

## ONE（後書き）

息抜き。三話くらいで終わる予定。

難しいこと考えずいちゃいちゃさせるのが目標。それにしちや二人、淡泊ですね（＾―＾；）

ここまで読んでくださってありがとうございます！

11日、大幅に加筆しました。

## TWO

今日、起きてから真っ先に浮かんだのは、それははにかむ彼女の顔だった。

それから足がふらふらと彼女の元へ向かって、口が勝手に誘い文句をしゃべり出して、めんどくさそうな彼女を引っ張り込んで来た。

彼女が欲しかったわけか。欲求不満？ 発情期が。  
それしか理由のつけようがないし必要もない。

部屋は明るく、真っ昼間から何女といちゃついてんのか、なんて言われそうだ。  
それでも。

後ろから抱きしめた彼女は、ゆっくりと力を抜いて臍をあずけてくれる。  
その柔らかさは、吐息とともに抱いたときに感じた甘い感覚を呼び覚ました。

「ふたりきりってさ．．．なんか、イケナイ気分になるな」  
「変態」

軽い罵りも、愛に感じる。  
馬鹿だな、なんて思っけどあながち間違った推論でもない気がする。

自然に笑みがこぼれて、ふとさっき言われた言葉を思い出した。

『恋人気取りしないで』

恋人だなんて思っていたことは一度だってない。彼女のほうも同じだろう。

そういう関係を、どこかしら俺たちは軽蔑していた節がある。

でも何故かその言葉を受け止めたとき、無性に切なくなった。

いつも、心のどこかに在る。  
他の女といっても分らない何かを。

それは、昔一緒にさまざまなコトを分け合ってたからとか、十歳若返るなんていう運命をとにした特別な女だからってのもある。

だけどそれともたぶん違う、何か。

（でも結局、振り分けてみてもわかんねえんだけど）

なんだか急に無気力になって、抱く力を緩めてしまった。

「今日のご飯、何がいいかしら」

腕の中の彼女がふと呟く。

「冷蔵庫みたら、お刺身と海苔が大量に入ってたから手巻き寿司なんかどうかと思うんだけど。」

腐らせちゃう前に食べないかね。なんであんなにあるの？」

「おっいいねえ、」

先日、父さんと喧嘩したと言って押しかけてきた母さんが酔った勢いで衝動買いしてきた生ものの類を見たときは、どう処理するか頭を抱えたものである。

結局翌日にはけろりと忘れて、買ってきた物を消費もしないで二ユーヨークへ発ってしまった。

食おう食おうと思っただけでもあんなにも量が多いと食べる気合いがすり減らされる。

「でもあんなにたくさんあると食べきれないでしょう？ だから、誰かさんたちを呼ぼうって思ってるんだけどどうかしら」

「歩美たちとか佐藤刑事たちとか？」

思いつく人物たちを浮かべながら訪ねると、彼女は満足そうに頷いた。

「どう？」

「え」

「？」

「だってさ」

せつかく二人きりになろうとこ連れ出してきたのに、そんなことしたら面倒見るのの後片付けに入浴まどろみはいおやすみ、そんなことになるのが目に見えている。

三日間有効に使いたいもんだ。

「特にやることもないし。 久し振りにあの子たちの顔も見たい

し、あなたも推理ヲタ症候群は相変わらずだけどそれなりに元気だ  
ってちゃんと知らせておかないと心配するわ」

「なんだよヲタって」

「ま、そういうことだから、連絡よろしく。ちょっと買い物行っ  
てくるから」

俺の腕から抜け出して、さっさと出て行ってしまった彼女を、む  
くれながら見送った。

## TWO（後書き）

息抜きなのにたぶん三話じゃ終わらん。どないしよう!!  
適当にペース配分しますとか言っても結局難しくくねくねと掘り下げてしまう嗚呼哀しき性。でもとことん趣味に走れるので楽しいです。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

### THREE

そのとき私はバルコニーにいた。

手すりに凭れ、緑色のカクテルが入ったグラスを一気に流し込んで、だれどかなりキツイ度数ですべて飲み干そうものなら喉が焼けてしまいそうだった。

グラスを目の前でゆらゆら波風を起こして見つめたりする。

このカクテル、なんだったかしら。

テーブルから適当に取ってきたから、何のカクテルかなんて聞いてない。

酒にはうるさかった組織にいたときでも飲んだことがない味だ。

夜風が、熱った顔に囁くように触れてゆく。

後ろの履き出しからは、まるで地獄絵図のような光景が繰り広げられていることだろう。

手巻き寿司などつくに腹の中に消え、この家の酒という酒を浴びるように飲んでいる最中だ。

「あつい」

もう六月も半ば、梅雨の晴れ間はむしむしとやりきれない暑さが支配する。

汗もかくものではなく、滲み出てくるようなもの。

それでも、雲が所々渦巻き、星や月が珍しく綺麗に私の目には映る。

私以外には、ただの夜の空にしかみえないのかもしれない。

それでもそれなりに酔った体には優しいのが夜の柔らかさ。

「志保ちゃんっ」

背後に気配が蠢いていると思ったら、気づけば肩をしっかりと組まれている。

それも二人から。

「志保さあんこんなところで何、た・そ・が・れ・てるのよう」  
恋煩い？」

「私たちもねえ、ちよつと酔い覚ましに外に出ようってえ。でもぜーんぜん酔い、覚めてないわあ」

「・・・そうみたいですね」

恋煩いだのなんだのを繰り広げている人は、迷探偵と昔称した園子さん。

酔い覚ましがどうたらといつも冷静な彼女はどこへやらの佐藤刑事。

二人に共通していることは、酒の匂いがぶんぶんして親父くさいことである。

一刻も早く立ち去って欲しいと祈りながら、カクテルを喉に流し入れた。

私もこんなふうには酔えたら、同化して騒ぐこともできるのにそれが困難だから、面倒くさい。

「いやあね？　蘭が二人の子持ちで幸せである今は、新一君が誰とくつついたって知ったこっちゃないんだけどさ。あんな推理アホをしつかり躰けられるの志保さんだけだし、志保さんだってそれに幸せだと思ふのねえ」

ね、そうだよなんて肩の腕をぎゅうつと締め付けられる。

始まったらしい。

「そうねえ、もう熟年夫婦なんじゃない？とか思っちゃうもの、ときどき。」

でもそれにしちゃらぶらぶか

「らぶらぶって何ですか」

「いやねえ、むくれ顔しちゃって。でもそういう顔もなかなかイケてるわよ。何しても可愛いんだからっ」

窒息で私が死亡したらあとをよろしく頼みたい。

「でもホントのところでなん？ デキちゃってたりするよね、やっぱ」

「デキてません」

「嘘。キス以上まで進んでてどうしてデキてないなんて言えるのあなた」

「別に好きとか言われてないし、友達で」

そう、友達。

もつと掘り下げれば違う名称の関係になるのかもしれないけれど、面倒くさいからそういう枠組みにはめることにしている。  
考えたくないから。

「ああん、志保さんはちつとばかり友達の枠組みを間違ってるわな。ね、さとー刑事」

「そうねえ、まあたくそのとーり。ざつつらいと。あ、あってるよねこれ」

「どう間違ってるんでしょう」

「あのね？友達ってーのは、そーゆーやらしいことしないのよ。プラトニックなの、ぷらとにつく。

でもやっぱあれか、男女間の友情って成立するかアブナイもんだからねえ」

「境目が難しいところよ。でも、ああたたちは友達っていう関係でないことは確か」

ふたりして、うんうん頷いている。

「別に関係性の名前を決めてもどうにもならないし面倒だから」

酔っ払いに何を言っても無駄なことは承知しているけれど。

「ああ、でもねえ、ちゃあんとそういうところ白黒つけとかなないと私たちが困るのよ。ねえ園子ちゃん」

「そうぞ。そっちが曖昧にしてるとき、こっちがやきもきやきもきしちゃってねえ。いつか新一君があたま悪い女に騙されちゃうんじゃないかとか、ほらアイツそういうことは馬鹿でしょ。それで鈍感な新一君に志保さんが知らない間に我慢しちゃうんじゃないかとか。だからそういうことになるまえに、ちゃんとそういうことははっきりさせておいたほうがいいのよ。あーやばいやばい吐きそ」

「・・・吐かないで下さいよ」

「でも二日酔い確定だし、ここはぱあつと行きましょ、ね」

「そーですわあ、志保さんどうする？中入る？」

「私はいいわ。火の中に自分から飛び込むほど馬鹿じゃないですから」

「つれないわねえ。ま、気が向いたら飲みに来てね。いこさとー刑事」

私の肩に絡んでいた腕は離れ、また私はバルコニーにひとりきりになった。

酒臭さとむつむつしていた熱気は冷まされ、ほっと一息。  
カクテルを一口含んで、火を吐きそうになる熱さを転がすように  
暖めた。

『ちゃあんとそういつとこ白黒つけとかないと私たちが困るのよ』

べろんべろんに酔った佐藤刑事の言葉が、ふっと過ぎった。

別に二人が心地悪さを覚えているわけではないからどうでもいい  
と思っていた。

でも、それにも心配してくれるひとのいい暖かい人たちが、たく  
さんいるのを忘れていた。

「・・・はつきりしたほーがいいかひら」

私も酔いが回り始めたかも知れない。

柔らかく輝く月に、なんだか涙が出そうになった。



### THREE (後書き)

一気に書きましたが、訳分らないかもしれないです。  
これでもつ三話ですね(^o^)( あと三話くらいかなあ。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

## FOUR

ずきずきと頭の中で鐘を鳴らされているような痛み、不快な目覚め。

今にもベッドの中に沈み込んでしまいそうな臍を、腕でなんとか支えて起こすくらりと脳がぐらめいた。

あまりの具合の悪さに、朝のまどろみの時間なんてもんはない。

「いてえ．．．」

二日酔いである。

いやいや自分はこれでも飲んだくれで、酒を飲めばとめどなくそれを体内に流し込むから二日酔いになるなんてこと百も承知。

だけどやっぱり、なつたらなつたでキツイんだから自分の矛盾さにはため息をつき、その息がまた酒臭いのに気づいてとりあえず水でも飲むか、とベッドを抜け出した。

とんとんと階段も揺れているような感覚で、またこりゃあ酷く飲んだようだな、なんて他人事のように思った。下りきっていつものリビングに顔を出すと、懐かしい味噌汁の香りが空腹をさした。

「あら、あなた起きたの？」

なんだかＡＶの姉ちゃんを着ているようなひらっひらピンクのエプロンを着て、宮野は台所に立っていた。

ことごと湯気をたてながらせわしく動いている様はなんだか、可愛くて顔がほころんでしまう。

近づいて、細い肩にあごをのせながら訊いた。

「今日の朝飯なに？」

「味噌汁とご飯となすの肉詰めと漬け物。あなた、酒臭いわよ」

手であおぐようにされて、ぱくつと口を押さえる。

「そーいや俺二日酔いか。忘れてた」

「そのテーブルに、私つくった薬あるから、水で飲みなさい」

「粉？粉きらい」

「ちゃんとカプセルにしておいたわよ」

「気が利く」

彼女をみたたん頭痛はちょっと和らいだのに、テーブルにあったカプセルを飲み込んだ。

すると吃驚、あつという間にさっきまで脳を浸食していた酒の鎮痛がまったく掻き消され、酒の匂いも吹き飛び、二日酔いという文字は俺の中から消え去る。

解毒剤の影響で普通の薬が効きにくい俺たちは、だいたいの医用品は志保お手製のもの。

それでもこの効き具合は半端じゃないと思う。

ご飯を作ってくれている宮野の邪魔をしたら悪いので（これでも自分の不器用さは身にしみて分かっている）ソファに座ってテレビを付けた。

特に興味を引かれない番組がどこのチャンネルを回しても続けられていて、ふと彼女の方をみた。

また吃驚した。

「ねえねえ志保ちゃん、これもう入れちゃったら？」

「焼け過ぎちゃうからまだ入れないのよ」

「でもちよつと焦げてるのがまたおいしーんじゃん。なあ服部」

「生焼け派」

「えええ？おいおいないだろ服部。ノロウイルスだか口蹄疫だかにかかっても看病しねえぞ俺」

「家畜やないっちゅーねん。黒羽に看病されたあないしされるつもりもない。安心しとき」

さつきは宮野ひとりだった台所が、色黒男と俺とური二つの顔の男が増えている。

彼女にたかってわいわいやっている奴らの中に飛んでいって割って入り込んだ。

「てつめえら何無断侵入してんだよひとんちに」

「あ、新一いたのー？おはよー」

のんきににこにこ笑う目の前の顔。

「なーんで朝っぱらからここにいて宮野にたかってるんだってきいてんだってば」

なんでって、ねえ、と二人で頷き合う。

「朝イチで服部とここに来てさーそしたら志保ちゃんがドア開けてくれたから。なんか昨日どんちゃん騒ぎしたんだって？」

「で、俺らもねーちゃんの片付けの手伝いしたったつちゅう」

「新一、みんな帰るなりボタンキューしちゃって志保ちゃんが一人で片付けしてたんだよ。ほーんと志保ちゃんに頼りつきりなんだから、ったく」

「そうなの？」

確かに昨日、みんなを送り出してからふらふらと引きずられるようにベッドに沈み込んでしまったのは事実。

そのあとどうしたかなんて気にも留めていなかった。

「そうだけど。もともと私がやるうって言ったんだし」

そう言ってふいっと料理の方に身を向けてしまった。

「ありがとう」

「別にいいわ」

「なんか俺にもできること、ある？」

悔しいけど、黒羽が言うようにほんとに宮野には頼りつきり。

いつでも可愛くない口だけど、結構矛盾している。

目さえも向けずにことごと包丁を動かしながら宮野は無機質に言った。

「あなたたちに出来ることは、じゃまだからさつさとあっちいつてることよ、男性陣」

「俺はいいよね、手伝えるもん」

何かと言いつて付けて宮野のそばに居たがる黒羽にちょっといらしながら、服部としぶしぶ退出した。

ソファになぜか並んで座って、テレビを目に映るままに任せた。なんとなく小さなどろどろの気持ちみたいなのが急に沸き上がった。

これはいったいなんなんだろうか。

たぶんこれは、宮野のことだって分かってるんだけど。

「なあ、服部」

「なんや」

「黒羽ってあれ？女たらし？」

「なんや今更」

「なんか、いらいらするっつか・・・」

たとえば、宮野と抱いたときは妙に大人しくなったり恥ずかしがったりするとか（焦らしておいてお願いする表情が堪らないと言っているとどん引きされる）、際どいところにほくろがあったりとか。

熱くって濃いコーヒーが好きなんだとか、ジブリだとラピュタがいちばん好きだとか。

そういうところ知ってるのは俺だけなのになって思ったり。

くだらない秘密である。

たまに、遠くにいるときすごく愛しくなっで、事件さえ放り出して飛んで帰って抱きしめたこともあった。

これはいったいなんなんだろう。

嫉妬？ まさか。

「恋人気取りしないで」

そう言われるだけの、友達なはずなのに。

友達に、こんな気持ちになったりするもんなのか？

服部にぽつぽつ喋っていくと、腕を組んでケタケタと笑いやがった。

「笑い事じゃねえって」

「すまんすまん。なんや、よかつたのう思てな」

「何が」

「あのねーちゃんとは、ただのやらしい関係だけやなかったってこと」

年上のような感覚さえ受ける穏やかな服部の眼差しに、ん？と首を横に曲げた。

「工藤、あのねーちゃんは別に工藤のもんやないんやで？」

「・・・そうだよ、な」

彼女は俺のもんでもなんでもない。  
他の人間に比べたら濃い時間を共有してきただけのこと。  
彼女にとっては、ただそれだけのことで。

「そういうの、なんちゅうか知っとるか？」

「独占欲？」

「なんや分かつとるん」

「うーんやっぱちがうかな」

「いやいやせやねん、間違つてへん」

「そうかあ？」

独占欲、ねえ。

ちらりと台所に目を潜ませると、黒羽と宮野が肩を寄せ合つてなにやら話し込んでいた。

また、何かちくちくした感情が過ぎつてゆき、自然に眉が寄つた。

「ね、志保ちゃん」  
「んー？」

手伝えるから残るなんて大層なことを言っておきながら、横にひつついてにこにこしているだけの黒羽くんを多少邪魔に思いながらグリルになすの肉詰めを入れて火を付けた。

本当は鮭にするつもりだったけれど、黒羽君の全力阻止によってこれになった。

「新一のことくちゃんときつちりしといたほうがいいんじゃないの？」

「昨日も言われたわよ、酔っぱらい二人に」

「で、何か行動起こそうとか思ってる？」

「なんでそんなこと訊くの」

「気になるから」

にこにこにこにこ、屈託のないその笑い顔が無性にむかつて殴り飛ばしてやりたくなった。

「そんなこと考えてないわよ」

「嘘だね。昨日から志保ちゃんは考えてるでしょー、それで夜ろくに眠れなかったと。俺には目に見たように分かる。この千里眼でね。うん」

「。」

図星をつかれて言葉に詰まる。

「やっぱりそうだったんだよね、結局どついう結論になった？」

「どうもなつてない」

どうもしていない、それは本当だ。

確かに、いろいろ考えてみたのだ。

自分は工藤君が好きなんじゃないかとか。

工藤君が私のこと好きなんじゃないかとか。

だけれど、どれもじっくり来ないしよく分からない。

ずっと、面倒だと言つて考えてこなかったから、心の糸のつなぎ方も忘れてしまったみたいだ。

「まああれだね。普通の女の子なら好っきやねーんで認めちゃうんだろうけど志保ちゃんたちの場合はそうはいかないから」

そう。

昔、本当にいろんなことがあつたから。

これは思い出すと永くなるし面倒だからやめる。でも。

何年経つても、互いを繋ぐこの鎖の痕は、完全に消えることはないといと私は思っている。

彼はもう、忘れてしまっているかもしれない。

私と工藤君のはじまりを、砂のように散らばり流されてしまふのなら、それはちょっと寂しい。

だから自分だけは覚えている。忘れない。

「付き合うとか、そういうのよく分からないから」

「んーまあ、志保ちゃんのしてみたいようにしてみればいいんじゃない。新一に甘えるとかならそれでもいいし、一度距離を置いてみてまたゆっくり考えるとかでもね。無理なこととしても訳分かんなくなるもん」

「また、工藤君みたいなこと言うのね」

「なんなら新一の代わりになつてあげてもいいよ？」

黒羽くんが笑った。

私も笑いかえた。

「じゃあひとつだけ教えただげる」

「何を？」

「新一が志保ちゃんにべたばれなのはまったく以てほんとだよ」

「そうかしらね？」

ちよつと疑うように言葉にニュアンスを込めて。

工藤君のほうを覗いてみれば、色黒探偵さんとなにやら肩を寄せて話し込んでいた。

あの二人、本当に気が合うらしい。



## FOUR（後書き）

もうちょっとで終わりそうです。

組織のこととか薬のこととかあまり出さないようにするーく書いているのですがどうでしょう。ちょっと分かりづらいですかね？

ここまで読んでくださってありがとうございます。

## FIVE

暑いなあ。

布団の中でもぞもぞ熱をもてあましながら、寝返りを打った。  
さっきまで自分の体温なんて気にも留めず、彼女だけに夢中にな  
っていた。

終わってみれば意識の外にあったものが戻ってくる。

顔をぐむっと布団の中に突っ込んでみると、さっきの吸い付くよ  
うな肌が思い出された。

ちよっと触れたい想いが膨らみ始める。

「工藤君」

ドアからシャンプーの香りが漂ってきて、布団から頭をねじり出

せばタオル一枚の宮野がいた。  
まったくこいつは、いつだって無防備だ。  
それは俺の前ではなくても。

「どした？」

「私のこと、どー思ってる？」

俺の目をまじまじ見つめながら、ベッドに座り込む。  
匂いが、また近くなり始めた。

「どうって？」

「感想みたいなよ。推理ヲタだなあとか、ネクタイ緩めるところは  
格好良くみえちゃうとか」

「それ俺のことかよ」

「ま、そんなふうな感じで私のことどう思ってるのか」

彼女が俺の躰に跨がって、顔を近づける。

「イイ女だなあとか、思うけど」

「それはいわれなくても分かってるわよ、ちゃんと。大切、とか  
好き、とか嫌い、とか」

「嫌いだったら抱くわけねえだろ？」

腰に軽く手を当てて、宮野の軀を固定する。  
なんだこれ、さっきと同じ体勢になってねえか。

「そりや、生理的に無理とか言うならあれだけど、心が無くても女を抱けるんでしょう?」

あなたをみてると思うんだけど。

「それはそうだけど、心がないって抱いて分かれれば、もう二度も抱いたりしねえよ」

「じゃあ、私には心があるってこと?」

「、」

目を見開いて宮野をみつめた。

宮野も、不思議そうにみつめる。

「そういうことになるのかなあ」

自分が今言ったことに沿って言えば、そうなるけれど。  
考えたこともなかった。

気づいたら宮野と会いたくて、会ったあとは欲しくなる。  
そういうループの繰り返し。  
これって、やっぱりそうなのだろうか。

『工藤、あのねーちゃんは別に工藤のもんやないんやで?』

そうなんだ。

どこにも、宮野と俺を確実につなぐものなんて、今はない。  
だけど、俺がこんなに宮野に執着してるのは――。

「宮野のこと、好きなのかも」

「好きだったって、好きにはいろいろあるらしいし」

「あるらしいって」

「分らないもの。私だって、あなたのこと好きだし。でも、ど  
ういう類の好きか、わからない」

俯きながら小さく呟く宮野は、滅法可愛くてどきりとする。

あんな凄艶な表情をみせながら大胆に俺の腕の中で動く奴だった  
っけか、なんて思う。

自分の臍を横にして彼女を布団の中に滑り込ませてぎゅっと抱き  
しめる。

柔らかい体は、風呂上がりのせいか肌がますますしっとりして  
てなんだかむずむずした。

「にしてもいきなりなこと言うな、なんで？」

「昨日ねえ、酔っぱらい二人に心配していただきましたから」

本当にお節介なんだから、と呆れながらもどこか嬉しさがにじむ  
顔を俺の胸に埋める。

「セフレならセフレ、友達ならそうだってはつきりしなさいって  
暗にいつてたわ」

「セフレって」

んなこと言う奴はだいたい想像できる。

あんにやる宮野に何吹き込んでるんだよ、なんて苦笑いした。

「じゃあ、はつきりしておいた方がいいのかって。ほら私、白黒  
はつきりしないと気が済まないでしょう」

「でも、関係をはつきりさせるってことしても、今までと何もか  
わらねえ気がする」

「それはそうだけど交わす言葉は、違うモノになると思うわ？」

「違うモノ？」

「うん」

黙り込む。

互いの息だけが行き交って、なにか空間でも作っているような錯覚に陥る。

「愛してる、とか」

ぴちゅぴちゅぴちゅ、といいタイミングで鳥が鳴き始めた。  
朝の光があたりまえのように侵入して。

なんだか照れくさくて、みつめていた瞳を落としてしまった。  
それは彼女も同じだったように。

「ま、今は、これでいんじゃない？」

ほんのり紅い彼女の唇に深く口づけ、湿ったタオルを思いつきり引きはがした。

## FIVE (後書き)

um - ? なんか不思議な書き上がりだったなあ。

これで終わるのだろうか、どうなのだろうか。 激しくミステリー。

ここまで読んでくださってありがとうございました。

## SIX

「志保おー」

聞き慣れた声。

振り向いた。

予想していた通り、見慣れた名探偵さんが自宅の窓から上半身をもたせていた。

「なーにやってんのー」

「見れば分かるでしょ、洗濯物干してるの」

「俺のも洗つといってくれたー？」

「柔軟剤抜きで洗つたわ」

「なにその微妙な嫌がらせ」

「ごわごわちくちくすればいいのよ」

「いや、あんま変わんなくね？」

ぱんぱんと博士のベッドのシーツを物干し竿にひっかけて洗濯ばさみで留めて、かごが空っぽになる。

それを抱えて彼の方を見上げるととても眩しい。

「工藤君、そういえばお昼ご飯食べた？」

「ううん、食ってない。何、食わせてくれんの？」

「聞いただけ。誰もご馳走するとは言ってないわ」

「俺、お腹と背中がくつついちゃうかも」

「そのまま餓死すればいいのよ」

「酷い志保さん」

本気でしくしくうなだれながら泣くまねをする工藤君にはんば呆れる。

でもなんだか可愛らしくみえてしまうのは、彼が年下だからという理由にとどめておくことにしよう。

それ以上は考えない。

「冷やし中華だけど。食べるなら来なさい」

結局なんだかんだ言っても私は工藤君に甘い。  
自覚するほどには。

そんな自分が嫌いじゃない自分に呆れている。

「おおお！さすが志保、やっぱり大好き」

にこにことなんの疑いもなく言う彼は、やっぱり太陽のせいでもなくまぶしい。

呆れるのでもなくその無垢さがちよつと愛しかった。

「そう軽くそういうこと言っちゃ駄目よ、本気にしちゃっから」  
「ちゃかせば、」

「本気にして構わないけど？」

へいきそうに言われる。

「私も好きよ、本気にしてね」  
「おう、もちろん」

こう言っておけば、どっちもどっちになる。  
あるのかないのか分からない枷は、どんなに固い鎖よりもつなげておくことができるときもある。

もしも仮に、この気持ちが過去になるときが来てもね。  
いまこの時間だけは汚さないでおける自信があるの。

「じゃ、食べるんなら早く来なさい。冷めちゃうわよ」  
「いや冷やし中華だし。冷めないし」  
「つべこべ言わないの。食べたくないの？」  
「食べる食べる食べます志保様」  
「わかればよろしい」

好きだという。

隣にいただけで笑えてくる。

それは、初々しい恋心なんていうものじゃないほど熟したものだ。

いるのがあたりまえ、そんなあたりまえ、あたりまえ。

いつかくる別れの時まで、このあたたかさがあたりまえでありま  
すように。

それまで、今は暇つぶし。

## SIX（後書き）

うまく書けたのかどうかよくわからない最終話です。更新遅くなった申し訳ございません。―――< いやはや恋人未満相棒以上の新志は大好きだああ愛しいい。

これからも、こういうのは書いていきたいかもと思う懲りない東野。

ここまで読んでくださってありがとうございます。―――<

+  
α (前書き)

番外編です。

+  
α

変わったのはあの三日間だと思う。

あれから、手をさりげなく繋ぐのもキスするのもそれ以上のことも、ただ受け入れるんじゃないくなった。

少し乾いた唇の感触、抱かれたときの汗ばんだ体。

今までの「好き」と、違う。

体の異変がわかったときは吃驚したけれど甘い嬉しさも疼いた。

でも、彼は？

気まぐれで私を抱いているとしたら。

相棒と体の関係が、彼を勘違いさせているとしたら。

急に不安になった。

かたちあるものなんてなかったから。

それを知ったら、どうなるのだろうか？

なら言えればいい。

いってみて、拒絶されたら、なんて予想はできている。現実の弾みから逃げる術は、ずっと前から習得している。そう言い聞かせて、落ち着かせた。

いつかは言わなくちゃいけないことなら早く言ってしまった方がいい、それが私の持論だ。

だから言ったのだ。

「あなたの子供、できたんだけど」

と。

言えはどつってことなかった。

夜の博士宅、博士はいつもどおり学会で留守。

いつものように押しかけてきて、珍しく「チャーハン作ってやるから」と台所にたつはいいものの後始末が面倒なことになりそうで  
陰鬱。

男ってものはやるだけやって終わりなんだから困る。

横からちらりとみて、耳障りな鼻歌とともにフライパンからご飯粒がぱらりと宙に浮き少しと言っただけではごまかせない量がガスコンロにこぼれるのをみて、もっと鬱な気分になった。

でもそのよく彼が流す洋楽の鼻歌がぴたりとまり。

何秒くらいの、沈黙がながと居座る。

きこえなかったのか、もう一度言おうと口をひらくと、工藤君がくるりと振り向いて、目が合つて。

「誰の子供？」

「あなたと私の」

「・・・マジ？」

「至つて本当」

「よかった」

「は？」

小説としてこの流れはたぶん未完成な文になるだろう、と頭の中で作り上げていたいきさつを断ち切つた現在。

「俺のものにしたかつたんだよね、」

「どついつと？」

首を傾げると、エプロンをときながら工藤君が私のまえに立つ。

推理小説の何ページがで犯人を当てたときのような、得意げな子供のような無邪気な笑いだ。

ム力つくから、腕の肉をつねりあげた。

いてえ、と軽く涙目になりこっちを恨めしそうにみると、隣にすわられる。

見つめ合う瞳が、今は無色だった。

「いま何ヶ月？」

「三ヶ月よ」

「何度もしたから、覚えてねえな」

「そのあいだだってしてたじゃない」

「ん、まあそうだけど。それくらいからかな。避妊やめたの」

「え？」

眉根がよる。

「子供ができれば、お互いある程度縛り付けられるだろ。そうし

たかった」

なんでもなさそうに切り捨てられる、眉間に皺がよる。

「・・・怒る？」

「なにが？」

「避妊、してなかったこと」

「だって、」

そういえば何だろう。

気付かないはずはない。

なのに、どうしてゆるしていた？

意識の中にそんなことなかった。

馬鹿？ 私も彼も。

「志保、子供、生みたい？」

「生みたいわ」

するりと答えた。

「なんで？」

「そう思うから」

「なんで？」

「直感」

「なんで？」

へりくつこねないで、と顔を背けると、あはは、なんて力の抜けた声。

疑問の連続なんて、おちよくってるようにしか聞こえない。

「あなたの子供よ？」

「うん」

「お腹も大きくなって、今はないけどつわりも来たりするかもしれない。臨月になって、生まれて、名前をつけて、これからが始まっていく。そこに、あなたはいないの？」

体が震える。

クーラーのせいだろうか。

決断のある言葉を出したからか。

今までの曖昧な引きずりが、終わる。

曖昧ほど都合のいいものはないだろう。

それに甘えてただけで、早く見切りをつけないといけない。

さつきから、ゆるく微笑む工藤君の顔が憎らしく思えてきた。

そうして曖昧に留まらせようって？

体を背もたれにあずけてのびをする。

気のせいだろうけれど、お腹の中にいるはずの赤ちゃんが動いたような。

むずむずっと。

「どっちかなあ」

「ん？」

「男の子か女の子か、どっちかなあって」

ほら、男の子は母親に女の子は父親に似るっていうだろ？どっちにしても綺麗な顔のつくりになる。

「自信家」

さもあたりまえのように未来を語り始める。

あたりまえ、増やしてはいけないものなのか。

嬉しかった。

安心した。

「できちゃった婚、で、なんか思うところないの？」

「え？だってそのつもりで」

「あ、そうか」

「むしろそれで幻滅されたかと思ってたけど」

「幻滅？」

「普通の女ってそういうことしたら怒るじゃん」

ぽりぽりと頬をかいて、そっぽをむく彼。

「ふつうね。知らなかったこっちはびっくりしたわ」

「ごめんごめん」

ほんとにのんびんだらりなんだから、と、肩に頭をのせてみた。

わずかに伝わる体温が、あたたかい。

家族、か。

いたときはあった。だけど覚えていない。

でもこの暖かさの中に戸惑いと既視感を感じていた昔を思い出す。

好き。

大好き。

いとしい気持ちが鋭く胸を突き刺す。

麻痺しているかもしれない。

ささやかに感じるぬくもりも、衝動的に沸き上がる快樂も。

「どうなのかなあ・・・」

「ん？」

「なんでもないわ」

「ふうん」

手を探り、男にしては長い指をはぐれながらにぎった。

指を絡ませて握り合うつなぎ方は嫌いだといっていたけれど、これなら許容範囲？

まわりがみえなくなる幸せなんて滑稽だけど。

「好き？」

「うん」

「なら結婚しようか」

「考えておくわ」

「え？」

「そんな粗末なプロポーズで私を釣れるとも思ってるの？」

立ち上がり、彼が外したエプロンをつけて台所をみる。

ぐちゃぐちゃに盛られたチャーハン、たまごの殻が散乱し、洗い物は合間合間にやっておかないとあとがめんどうなの。

後始末はいまのうちに。

どんなシチュエーションを仕掛けてくるだろうか？

少し楽しみでもある。

もし自信满满であの展望レストランに連れて行かれたりしたら、とことん昔の話でいじくってやるわ。

それでも、嬉しかったりするんだろうけど。



+ α (後書き)

番外編？です。キャラが違うかもです。

ここまで読んでくださりありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8909/>

---

killing time

2011年2月11日15時55分発行